

平成23年度 全国女性建築士連絡協議会 京都大会 開催

景観まちづくりからコミュニティの再構築へ —— 京都で考える 日本のまちと暮らし ——

平成24年2月17日(金)・18日(土) 会場：みやこめっせ(京都市勧業館)

東日本大震災を受け、昨年7月から延期開催となった平成23年度全国女性建築士会連絡協議会(全建女)京都大会に、全国から約500名が参加、2日間の活気ある大会となった。

初日は全国女性委員長会議の後、東日本大震災後の現状と仮設住宅の課題について被災3県から報告され、それぞれ過酷な状況の中、建築士としての使命感のもと取り組んできた貴重な活動報告がなされた。その後、高田光雄氏による基調講演が行われた。

2日目は、大会初の試みとなる8つのテーマに従ってのフィールドワークと分科会で意見交換。最後に藤本昌也会長による結びがあった。

日本各地、そして被災地におけるまち・暮らしづくりの根幹に「コミュニティの創出」の大切さ、また、全国の建築士のネットワークと交流の意義も再確認された。その多くの会員が結集した熱気ある大会の概要を紹介する。



全国女性部会長(委員長)会議

長い歴史・文化に裏打ちされたまちづくりの中で、子どもからお年寄りまで深く包み込む環境とコミュニティを形成してきたと認識しています。ここ京都で観、聴き、共有した貴重な経験に基づき、私たち女性建築士が一人の人間として、地域に帰って、何を選択して実行すべきか、心に刻むよい機会にしたいと願っています。

ごあいさつ

衛藤照夫(社)京都府建築士会 会長

平成22年に準備委員会が立ち上げられ、他の委員会からも参画の声が上がり、最終的にはオール京都で進めようということになりました。

大会テーマには、大災害に自然の脅威を思い知らされた今こそ、地に足のついた暮らしをともに助け合いながら取り戻そうという思いが込められています。また、人と人が気遣って暮らすコミュニティが残る京都で日本の暮らしを考えていただきたいとの思いも込められています。

現在、建物の耐震化や空き家対策などに力を入れており、近代名建築の京都会館再整備計画も注目されています。これらの動きに合わせ、地域の建築士としての役割を果たすべく、参画活動しているところです。このたびの全建女京都大会の開催は、全国のみなさまより貴重なご意見をいただける機会としてよるこばしい限りです。

開催にあたって

定行まり子(社)日本建築士会連合会 女性委員長

今般のプログラムの内容は非常に濃密であり、参加申し込みは約500名で、過去最高を記録しています。

昨年の東日本大震災後すぐに、8月の全国建築士の大坂大会の中止が決定されました。それに伴い7月の全建女京都大会も、当然中止という空気が漂っていましたが、京都からこういう時だから開催すべきとの力強い発信がありました。その熱意に突き動かされ、時期を延期しての開催に至ったものです。

今ほど、未来を担う子どもたちの命を守り、育成する環境を守ることの大切さを実感したことはありません。子どもの住まない(住めない)街は減びてしまうと危惧しています。京都では、



定行まり子
日本建築士会連合会
女性委員長



衛藤照夫
京都府建築士会会長

東日本大震災の「現状報告」と「仮設住宅」の現状および課題

現在、岩手県・宮城県・福島県の3県の被災地の実状と、抱えている課題、仮設住宅の居住環境および問題点について、全国女性建築士連絡協議会全体で共有することが重要であるとの認識から、以下の方々から報告がなされた。詳細は、(社)日本建築士会連合会のホームページ(東日本大震災関連情報)、または大会パンフレットを参照されたい。

<発表者>

(社)岩手県建築士会

・小山田サナエ(女性委員会委員長)

・大森典子(女性委員会副委員長)

(社)宮城県建築士会

・今野やす子(女性部会会長)

・清本多恵子(女性部会副会長)

(社)福島県建築士会

・島田マリ子(女性委員会委員長)

・菅野真由美(福島支部 NPO法人ユニバーサルデザイン・結 副代表理事)



岩手建築士会による東日本大震災の現状報告



基調講演会場風景

私たちが京都で経験してきた景観まちづくりは、まさに、異なる価値観の人々が互いの存在を認め合って、同じ空間を共有する試みだったと思います。

景観の公共性は、個人と行政の関係だけに問題を帰結させてはいけません。地域ごとの「価値の共有」、すなわち、「まち」の将来像をつくり育てる仕組み、地域の共同利用資源の管理システムが、それを支えるという認識が重要です。

景観まちづくりの促進のためには、それぞれの地域で、こうした取り組みを支援する専門家が必要とされています。各地域の建築士は、景観まちづくりの外部の支援主体としての役割が大いに期待されているのです。(主旨抜粋)



高田光雄
京都大学教授

基調講演

「京都の景観から考える地域のまちづくり」

高田光雄(京都大学大学院工学研究科建築学専攻 教授)

高田氏は、京都における景観問題への取り組みをまちづくりの視点からとらえ、地域のまちづくりとその支援のあり方について次のように講演した。

「景観」は、自然や街の姿形のことであるが、生活や暮らしの表出という意味合いもある。地域の産業がうまくいかなくなり、コミュニティが壊れると、まちなみは混乱してきます。

「まちづくり」は、平たく言えば、「自分たちのまちは自分たちで守り育てるという活動」ですが、その内容は変化しています。異なる価値観を認め合うことが、持続可能なまちづくりの課題であり、その仕組みづくりが重要だということです。

分科会+フィールドワーク

景観まちづくりからコミュニティの再構築へ

■ A分科会 景観まちづくり

- A-1コース：秦家と修徳学区
- A-2コース：伏見
- A-3コース：京都駅周辺

分科会では、フィールドワークで感じられたキーワードを掲出して、まちなみ形成とコミュニティの関わりを考察。一人ひとりが周りを見渡し意識することがデザインコードに頼らない景観まちづくりにつながることを認識(参加者96名)。

■ B分科会 環境共生住宅

- Bコース：大山崎

80年前に環境工学に基づき建設された「聴竹居」に、機能とデザインの融合を確認し学んだ。分科会では日頃取り組んでいる事例を発表し意見交換。地域の環境もそれぞれ違うが、



A分科会フィールドワーク。秦家と修徳学区
写真：藤本善明

学んだことを一つでも取り入れて建築していくことを確認しあった（参加者38名）。

■C分科会 健康住宅と素材

- Cコース：堀川東
- ◎事例発表：宮城県建築士会
「低湿乾燥のスギスリット材が空間の空気を浄化する」

フィールドワークでは、古い町並みを改修し、京都の伝統を伝えている「よしやまち町家校舎」でレクチャー後、伝統の技を見学（参加者40名）。

■D分科会 建築物の再生活用

- Dコース：三条通
- 三条通りの近代建築の町並みは、商業から利用形態を変え、町家をうまく融合し再生。建築士会が介在してコミュニティを紡ぎ出した好例である。参加者も地域で抱えている問題を分科会で掲出。地元を持ち帰ることで、地域活動の活力につなげていく（参加者36名）。

■E分科会 歴史的な建物とまちなみ

- E-1コース：祇園町南側地区
伝統的な街区の景観とまちづくり
- E-2コース：姉小路界わい
まちなみ整備と暮らしを守る
- E-3コース：清水学区
歴史的まちなみを守る防災システム

各地域でまちづくりに取り組んでいる重要人物3名がフィールドワークで案内。建築士が専門性を発揮しながらまちづくりに関わることで論点が整理され、コミュニケーション形成につながると語られた（参加者83名）。



E分科会「姉小路界隈を考える会」谷口親平事務局長によるレクチャー

■F分科会 子どもと住環境

- Fコース：明倫学区
明倫学区の子どもの暮らし今・昔
- ◎事例発表-1：北海道建築士会
「高校の先生たちと住教育セミナー」
- ◎事例発表-2：鳥取県建築士会
「地域でも防災学習をサポートしよう」

明倫地区ではマンションの新しい住人が祇園祭りや地藏盆など祭りの運営にも参加し、コミュニティを再生させている。「伝承」「継続」「つながり」というキーワードを確認（参加者38名）。



F分科会フィールドワーク。明倫学区。吉田家（町家）の前にて写真：藤本善明

■G分科会 高齢社会

- Gコース：六原学区
地域の高齢化・空き家対策への新たな取り組み
- ◎事例発表-1：岡山県建築士会
「『手すりの会』の紹介」

フィールドワークではコミュニティを守り続けたいという人の活動がまちづくりにつながっていることを実感。情報発信力がポイントとなり、コミュニティがあるところは地域再生が行われていくと結んだ（参加者33名）。



G分科会による全体会議での報告

平成23年度 全国女性建築士連絡協議会アピール

社団法人日本建築士会連合会 女性委員会

1. 私たちは、今回の協議会を通し、女性建築士として、生活や地域に密着したきめ細かい実践活動を行う専門家として、これからも一丸となり、より地域の実情に即した「くらしづくり」=コミュニティの再構築を提案していきます。
2. 私たちは、今回の基調講演を通して、女性建築士の役割・社会的責任の大きさを再認識し、これからの将来を考える地域社会の中で、住民・行政・事業者の連携を、サポートしながら、専門家として、地域の暮らし・まちなみの景観・豊かな住環境づくりの主体となり努めます。
3. 私たち女性建築士は、継続的な活動を通して、美しい風土や、文化を守り、専門家と生活者の双方の視点からの提案や提言によって、子どもや高齢者が安全で安心な生活が出来る持続可能な社会の実現をめざします。
4. 私たちは、東日本大震災の報告を通し、地震・津波・原発の甚大な被害によって受けた心の痛みの共有を風化させてはならないことを再認識し、女性建築士のしなやかな特性を生かしたネットワーク（絆）をさらに深め、次世代へ繋ぐ環境と命を守るため、低エネルギー社会の構築をめざします。

■ H分科会 集まって住む

● Hコース：西陣界わい

居住者を受け入れるまちづくり

多様な職種の人たちが集まって住んでいる紋屋町三上長屋。昔ながらの長屋に新しい人々を受け入れるまちづくりを紹介。岩手県と福島県の建築士会も参加し、形態は異なるが仮説住宅での「集まって住む」意味を議論し深めた(参加者30名)。



H分科会での
討議の様子

会長結びあいさつ

地域リーダーをめざす、これからの建築士に求められるプロデューサー的資質と能力とは何か
藤本昌也(社)日本建築士会連合会 会長

フィールドワークと分科会での議論の集約など、「京都方式」とも呼びたい今回の企画は、建築士会、連合会の実践活動の姿はかくあるべきと、高く評価したいと思います。

今後建築士に求められる役割とは何か、それは、<もの><まち><くらし>の3つの視点からの課題を、総合的に解いたかたちで建築活動を実践することです。

東日本大震災後のまちづくり・住まいづくりを考える上で言いますと、3月に基盤整備として、都市計画が市町村に提案されるわけですが、心配なのは、都市計画と建築の関係が乖離しがちだということです。都市サイドが描いた絵というのは、ともすれば上物整備など、まちなみや生活などを総合的に考えたものではないのです。そのまま行くことのないよう、われわれ建築サイドから都市サイドにものが言えるようにしないといけない。必要なのは、建築と都市を統合する「まちづくり」だと言えます。

「まちづくり」というキーワードは、都市と建築が乖離している今の生活空間づくりのアンチテーゼとして、建築士が積極的に提案していかなければなりません。これからの建築士は、人間的で豊かな生活空間を再構築する必要があります。

り、そのためにも、生活空間整備に向けたまちづくりコーディネーターの役割も担う必要があるのです。

<もの><まち><くらし>づくりのいずれにしても、建築士は総合的に語るができる素養を持ち合わせているはず。全体をプロデュースできる能力を持ち、その上で、専門分野もこなす。

地域リーダーをめざすこれからの建築士は、生活空間づくり総体をプロデュースし、マネジメントする能力を身につける努力をしていただきたい。そうした資質、能力を持つ建築士こそ地域リーダーにふさわしい建築士——コミュニティ・アーキテクトだと思います。(主旨抜粋)

謝辞

平成 23年度
全国女性建築士連絡協議会京都大会

西田教子(京都大会実行委員長)

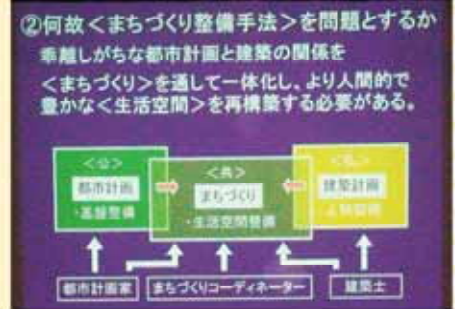
全国、また、岩手・宮城・福島からの大勢の方の参加をいただき、心から感謝申し上げます。

思い起こせば昨年、東日本大震災の影響から全国大会が中止ということは、7月開催予定の全建女京都大会も当然中止……、それに気がついた瞬間、頭の中が真っ白になり、仕事も手につかないほどの空虚感に苛まれました。

しかし、阪神淡路大震災時の近接県として経験から、「無用な自粛は、単なる萎縮に繋がるだけ」ということを思い出し、今だからこそ、元気な関西から、全国に向けて発信できることがあるはずと、早速、定行委員長とお会いして、話し合うことにしました。

定行委員長も熱い思いは同じで、高田先生にも、「このような非常時だからこそ、日常生活が大事、生活の場があるコミュニティが大事」と力強く背中を押していただいて、延期開催されることになりました。

「京都は、開催地として立候補します！」と手を挙げさせていただいてから、足掛け5年。万感の思いを胸に、この大会を迎えることになりました。皆様多大なご助言・ご協力をいただき、心から感謝申し上げます。(主旨抜粋)



建築士に期待される役割のフローチャート。「会長結びあいさつ」から



藤本昌也
日本建築士会連合会 会長



西田教子
京都大会実行委員長